

パリ市と郊外

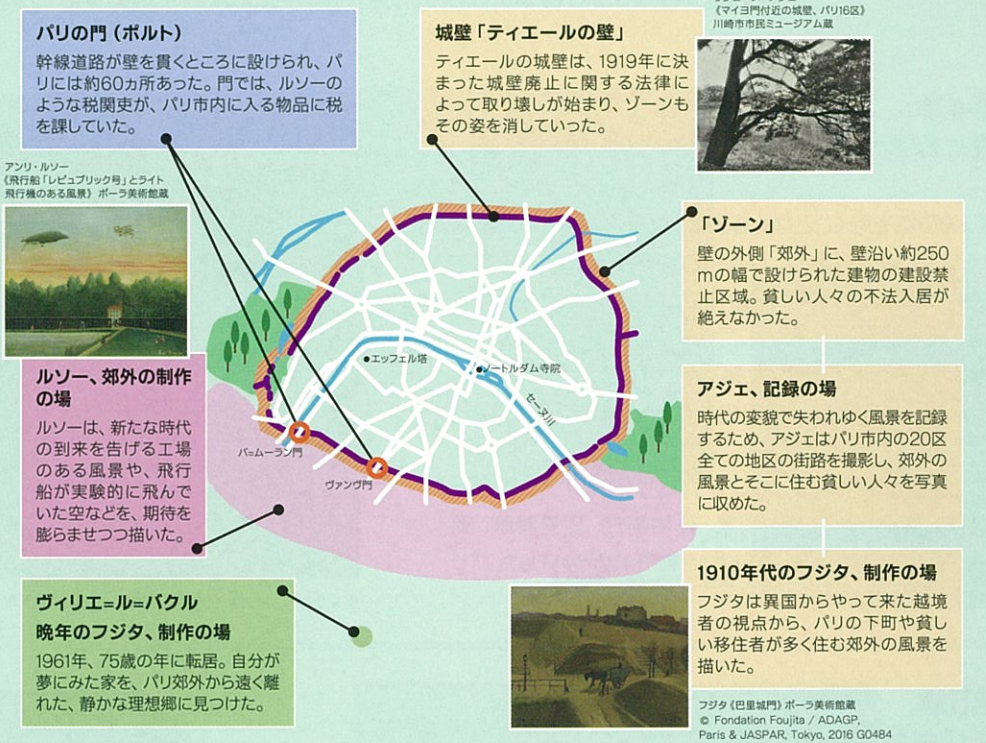
1840年以降、パリには「ティエールの城壁」と呼ばれる、街を取り囲む壁がありました。

19世紀後半から20世紀初頭、パリ市は急激に人口が増加し、街の中心部に対し、「郊外」(バンリュウ)という場の概念が形成されるようになります。

パリを取り囲む壁の外、パリの周縁部「ゾーン」には、パリ市外の工場労働者や廃品を回収、分別して売るくず屋など、貧しい人々の不法入居が絶えませんでした。

また、郊外には、工場や鉄道橋など新たな時代の到来を告げる建造物が造られます。

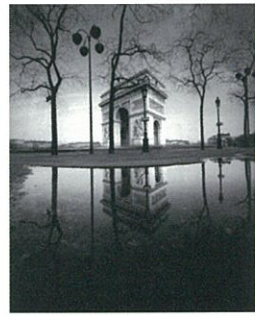
ルソー、フジタ、アジェの3人は、20世紀に生まれた「郊外」の風景を、それぞれの視点から表現しています。



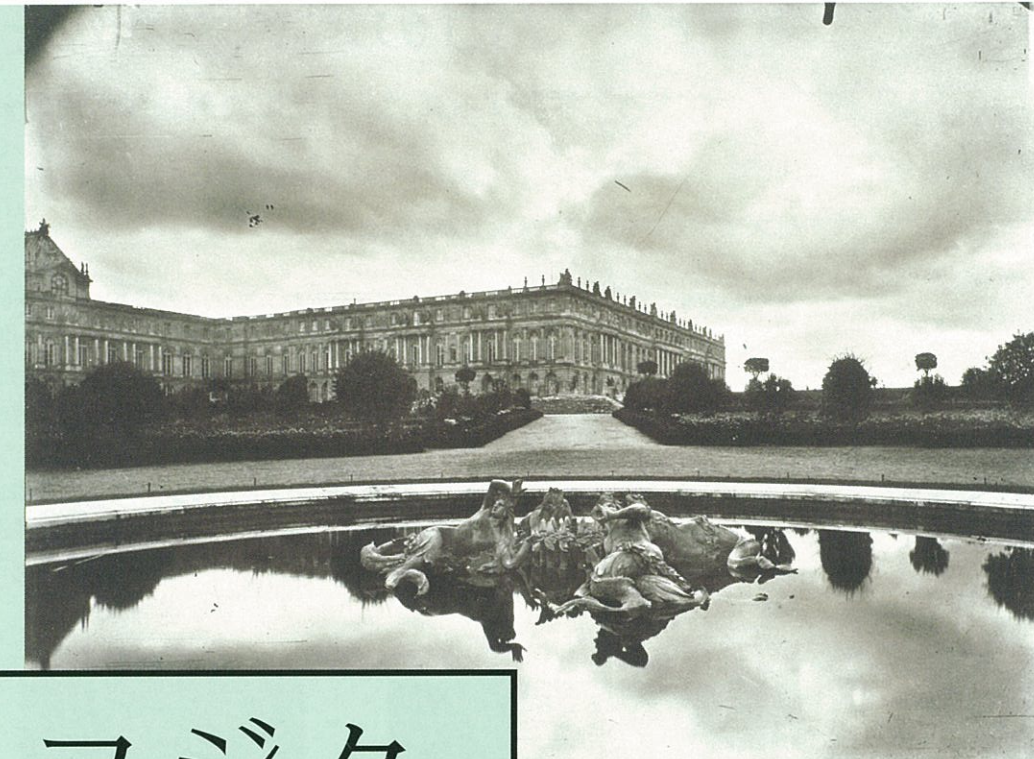
展覧会関連イベント

記念講演会
「ベル・エポックの光と影
— アジェとその時代」
2016年10月8日[土] 14:00—15:30
講師：小倉孝誠
(フランス文学者、慶應義塾大学教授)
会場：館内講堂
先着100名様まで
聴講無料(要入館券)

針穴写真ワークショップ〜アジェの時間を追体験しよう〜
2016年10月15日[土] 13:00〜16:00頃まで
写真技術の原点ともいえる針穴写真を体験することにより、アジェの写真術や、撮影にかけていた時間を追体験するようなワークショップです。紙製のピンホール(針穴)カメラを自分で組み立て、美術館周辺の自然を撮影します。印画紙での撮影や暗室での現像作業を通して、デジカメやスマートフォンとは一味違った写真術を学びます。
講師：田所美恵子氏(針穴写真家)
参加費：1,000円
定員：15名
参加方法：事前申込み
※ 詳しくはホームページをご覧ください



問い合わせ先 ポーラ美術館 広報事務局 担当：森下、川島
TEL. 03-6805-0436 / FAX. 03-6805-0437 Mail : polapr@epochseed.jp
ポーラ美術館 広報担当：中西
TEL. 0460-84-2111 / FAX. 0460-84-3108 http://www.polamuseum.or.jp/



ウジェーヌ・アジェ 《ヴェルサイユ》 1903年
川崎市市民ミュージアム(展示期間：2016年9月10日 - 10月23日)

ルソー、フジタ、 写真家 アジェのパリ

— 境界線への視線 Artists on the edges of Paris: Le Douanier Rousseau, Foujita, and Atget



アンリ・ルソー 《シャラント・ノル・ポン》
1905 - 1910年頃 ポーラ美術館蔵

2016年9月10日[土] — 2017年3月3日[金]

パリの境界線をなぞる

拡張する郊外、時代の変貌を見つめるまなざし

かつて壁や防壁に囲まれていた城砦都市パリ。

20世紀初頭には、都市の周縁に移民や貧困者が住み着き、パリの街が拡張されていきました。その都市拡張のダイナミズムをなぞるように、郊外に出現した風景を鋭くとらえたのがアンリ・ルソーであり、また、パリに1913年に到着した越境者レオナルド・フジタ（藤田嗣治）でした。さらに、画家たちだけでなく、「近代写真の父」とも呼ばれるウジェーヌ・アジェをはじめとする写真家たちもパリの変貌する姿をうつし出しました。

20世紀以降、世界各地の都市部に生まれた郊外の風景に視線を向ける美意識は、まさにこのパリの境界線上で醸成されたのです。本展では、先の3人の作品に加え、同時代のパリを生きる画家モーリス・ユトリロや佐伯祐三などの作品をあわせて紹介しながら、都市の境界線に映し出される“時代の変貌”へ向けられた視線をたどります。



アンリ・ルソー 《エッフェル塔とトロカデロ宮殿の眺望》
1896-1898年 ポーラ美術館蔵



ウジェーヌ・アジェ 《ランブシェード売り》 1899-1900年
川崎市市民ミュージアム蔵
(展示期間：9/10-10/23)



レオナルド・フジタ（藤田嗣治）
《古着屋》 1958年 ポーラ美術館蔵
© Fondation Foujita / ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2016 G0484

会 期	2016年9月10日（土）～2017年3月3日（金）※ 会期中無休
主 催	公益財団法人ポーラ美術振興財団 ポーラ美術館
特別協力	川崎市市民ミュージアム、東京国立近代美術館、横浜美術館
作品点数	約120点（絵画、写真、版画）※ 会期中、展示替あり
出品作家	アンリ・ルソー、レオナルド・フジタ（藤田嗣治）、パブロ・ピカソ、モーリス・ユトリロ、モーリス・ド・ヴラマンク、ジョルジョ・デ・キリコ、佐伯祐三、里見勝蔵、岡鹿之助、ウジェーヌ・アジェ、アンドレ・ケルテス他
会 場	ポーラ美術館 〒250-0631 神奈川県足柄下郡箱根町仙石原小塚山1285 ☎ 0460-84-2111
開館時間	9:00～17:00（入館は16:30まで）

入館料

個人	
大人	1,800円
シニア割引（65歳以上）	1,600円
大学・高校生	1,300円
中学・小学生	700円

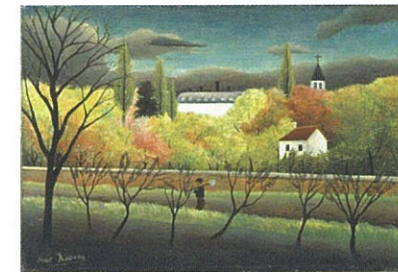
団体（15名以上）	
大人	1,500円
シニア割引（65歳以上）	1,500円
大学・高校生	1,100円
中学・小学生	500円

※ 料金はいずれも消費税込み。
※ 中・小学生の入場については、土曜日は無料です。
※ 中・小学生が授業の一環として観覧する場合、中・小学生および引率教員等の入場料は無料です。

ルソー、アジェ、フジタを惹きつけた「境界線」の魅力とは？

みどころ1 パリ郊外の「诗情」

ルソー、アジェ、フジタの共通点は、20世紀初頭にパリの下町、モンパルナスの近辺に暮らし、パリとその郊外をモチーフに風景を写し取ったことです。この3人は、ともに華やかな市街地ではなく、パリの郊外へと視線を向けていきました。そこは、19世紀と20世紀の人々の生活、都市と自然などがせめぎあう境界の場であり、彼らはそれぞれの視点から新世紀の诗情を読み取っていったのです。



アンリ・ルソー 《果樹園》 1886年 ハーモ美術館蔵



ウジェーヌ・アジェ《マイヨ門付近の城壁、パリ16区》
1909年 川崎市市民ミュージアム蔵
(展示期間：9/10-10/23)

みどころ2 絵画と写真。現実を写し、現実を超える。

税関吏の職につきながら、日曜画家として精力的に活動したアンリ・ルソーと、「写真家の税関吏ルソー」と呼ばれたウジェーヌ・アジェ。ルソーとアジェは共に40代の頃から独学で固有の表現を模索し、無名ながらも若手の前衛芸術家たちに20世紀の芸術の先駆者として見出された特別な存在でした。ルソーの即物的な人物画や、細密に描写された幻想的なジャングルの風景画は、ピカソや詩人アポリネールに讃えられました。また、アジェの街路の質感まで克明に記録する写真術や、現実を写しながらも、非現実的な世界を感じさせる作品は、後にシュルレアリストたちの称賛を得たのです。

本展では、ルソーの作品を10点、アジェの作品を（4期に分けて）約120点展示いたします。



アンリ・ルソー 《エデンの園のエヴァ》
1906-1910年頃 ポーラ美術館蔵



ウジェーヌ・アジェ《中庭、プロカ通り41番地、パリ5区》
1912年 川崎市市民ミュージアム蔵
(展示期間：9/10-10/23)

みどころ3 ふつうの「芸術家」ではない型破りな3人

税関吏として働きながら職業画家をめざした日曜画家ルソー、職人でありたいと願った芸術家フジタ。そして芸術家ではなく記録写真家であり続けたアジェ。3人は独学の精神から、いわゆるアカデミックな芸術とは異なる、それぞれ型破りな芸術的アプローチを生み出します。その獨創性は、伝統にとらわれることのない主題の選択にも垣間見られ、既存の芸術の“境界”を超えることで、3人は比類ない作品を生み出すことに成功したのです。



レオナルド・フジタ（藤田嗣治）
《自画像》 1929年 ポーラ美術館蔵
© Fondation Foujita / ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2016 G0484



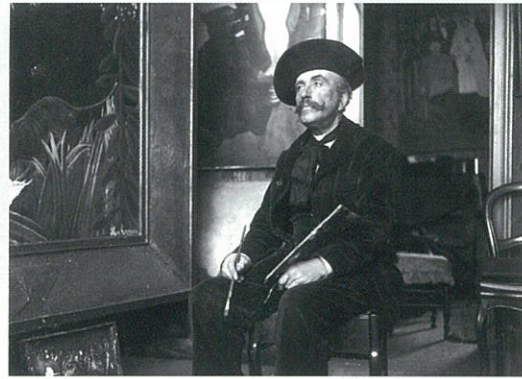
レオナルド・フジタ（藤田嗣治）
《仕立屋》 1959年頃 ポーラ美術館蔵
© Fondation Foujita / ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2016 G0484

作家・作品紹介

アンリ・ルソー (1844-1910年)

「郊外的美」に悦びを見出した日曜画家

職業：税関吏



フランス北西部の町ラヴァルに生まれる。パリで通関税徴収の職を得て、パリ市内と郊外を結ぶ門や河岸などの巡回にあたる。美術学校に通うことなく40歳の頃に本格的に絵を描き始め、独自の画境を切り拓く。日曜画家として果敢に発表を続けるルソーを、同郷の劇作家アルフレッド・ジャリが賛辞を込めて「税関吏ルソー」と呼んだことから、この名で知られるようになった。

伝統的な画題にとらわれることなく、エッフェル塔や鉄橋などの産業発展の象徴を描き、都市と田舎が出あう郊外の労働者階級の憩いの場には、いきいきとした新しい時代への息吹と期待感を見出した。

レオナルド・フジタ (藤田嗣治)
《税関吏》1959年 ポーラ美術館蔵
© Fondation Foujita / ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2016 G0484



《アンリ・ルソー パリ、ベルセル街》1907年 パリ、ラルース蔵
© Archives Larousse / Bridgeman Images

ルソー 《シャラントン=ル=ポン》

1905-1910年頃 ポーラ美術館蔵

シャラントン=ル=ポンは、パリ市の南東にあるヴァンセンヌの森、セーヌ河とマルヌ河に囲まれた河川運輸の要衝であり、19世紀後半より栄えた地域である。19世紀末には釣りや散策などの余暇を楽しむ新名所となっていた。当時、アジェも足を運び、レンズで河岸をとらえている。鉄道橋を越えて工業地帯を眺める光景は、20世紀の絵画、写真、映画で表現された、労働者階級の視点から見た典型的な郊外風景の象徴であり、21世紀においても、なお色褪せることのない現代性を宿している。



ウジェーヌ・アジェ (1857-1927年)

パリの記録者にして、近代写真の父

職業：写真家

ボルドー近郊のリブルヌに生まれる。役者になるが挫折し、33歳の頃に画家を目指すも断念。その後、職業写真家を志し、芸術家や装飾家の制作の資料となる写真や、パリの街並みや職人の姿、郊外の風景を撮影する。歴史的建造物、古い街並、店先、庭園、そこに住まう人びとなど、変わりゆく「古きパリ」を丹念に記録した。それらの写真は、パリの貴重な記録として、図書館や博物館に収められた。

晩年に、アジェの近所に住んでいたアメリカ人の画家で写真家のマン・レイと助手のアボットにより写真が見出され、シュルレアリストの雑誌で紹介されて以降、広く知られるようになり、没後に高い評価を得た。

ベレニス・アボット撮影《ウジェーヌ・アジェ》1927年 川崎市市民ミュージアム蔵 (展示期間：9/10-10/23)



レオナルド・フジタ (藤田嗣治)
《写真家》1959年頃
ポーラ美術館蔵
© Fondation Foujita / ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2016 G0484



アジェ 《ヴェルサイユ》

1903年 川崎市市民ミュージアム蔵
(展示期間：9/10-10/23)

アジェは、1901年頃から王政時代の宮殿と庭園があるヴェルサイユやサンクルーをたびたび訪れ、晩年まで撮影し続けた。広大な庭園と壮麗な建造物や彫刻が取り合わされたドラマティックな光景は、ロマンティズムにあふれている。

この作品では、宮殿と噴泉の水盤、そして湧き上がる雲が一つの眺望に収められており、とりわけ、アジェはこの空にこだわったとされている。

レオナルド・フジタ (藤田嗣治) (1886-1968年)

あらゆる手仕事を愛した職人画家

職業：画家

東京生まれ。東京美術学校を卒業後、画家をめざして1913年に渡仏。乳白色の滑らかな下地に繊細な黒の輪郭線を描く手法を確立し、エコール・ド・パリの代表格として人気を博した。1955年、フランスに帰化。

職人気質のフジタは、絵筆を持つ手先の器用さはもちろんのこと、裁縫、大工仕事、金属の加工、絵手紙などにも手わざの才能を発揮し、洋服から自宅の内装までも好む通りに手作りした。ひたむきに技術を磨こうとする職人たちに共感を抱き続け、〈小さな職人たち〉のシリーズには、さまざまな職人の姿を描いている。本展覧会では、1910年代にパリ郊外の風景に原点を見いだし、その後も画家と職人の境界を超えたフジタの、手仕事に生涯を捧げた越境者としての制作を追う。



レオナルド・フジタ (藤田嗣治)
《天オ》1959年頃
ポーラ美術館蔵
© Fondation Foujita / ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2016 G0484

土門拳撮影《額縁の木地を接着するフジタ》1941年

フジタ 《巴里城門》

1914年 ポーラ美術館蔵

かつてのパリは、防壁や石組みの壁からなる城壁に囲まれていた。フジタはフランスに渡ったばかりの1910年代に、この城壁周辺の風景を主題にした作品を多数手がけ、本作はその最初の一点とされている。本作はフジタがいったん画商に売却した後に、旅先で買い戻し、「快心の作。デングリ返しを打ちて喜びたる」と裏に書いた、記念碑的な作品でもある。

作品には、防壁に通された街道を、パリ市内に向けて馬車が行く風景が描かれ、土塁の向こうには、工場とその煙突が立ち、パリ市内とは全く異なるわびしい郊外の佇まいをのぞかせている。このパリ市街の境界線となる城壁の外側の地帯は「ゾーン」と呼ばれ、緑地が広がり、パリの変化を支えた労働者たちが散策をする憩いの場となっていた。



© Fondation Foujita / ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2016 G0484

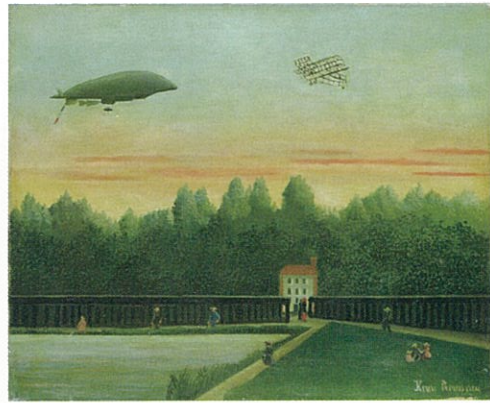
展覧会構成

ルソー、アジェ、フジタの「パリ」。変貌を遂げる都市とその郊外。
 人々の生活や風景をうつす画家や写真家たちの、「変化」へのまなざしを作品から繙きます。

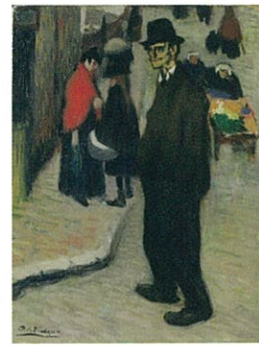
第1章 変貌する都市パリ：ルソーとピカソ

19世紀後半から20世紀初頭、パリの人口は劇的に増加し、都市の様相も変化して郊外へと生活の場が拡張していきました。ルソーは新しく生まれた郊外の憩いの場の情景を描き、新世紀の息吹あふれる風景画を生み出していきました。

また、同時代にそのルソーを敬愛した画家はピカソです。1900年に初めてパリを訪れた20代のピカソは、世紀末の都市風景とそこに暮らす退廃的な生活者や異邦人たちを描きとめました。二人の作品から、世紀転換期のパリの空気をご紹介します。



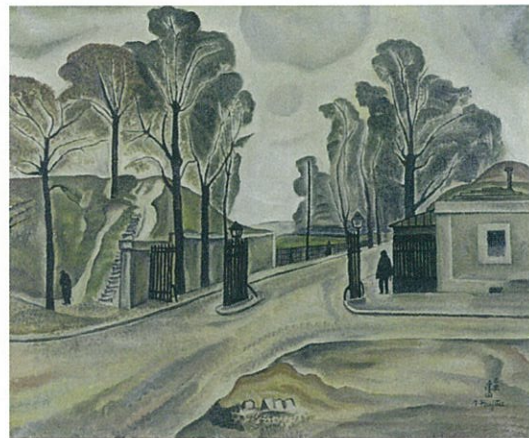
アンリ・ルソー
 《飛行船「レジュブリック号」と
 ライト飛行機のある風景》
 1909年 ポーラ美術館蔵



パブロ・ピカソ 《通りの光景》
 1900年 ポーラ美術館蔵
 © 2016 - Succession Pablo Picasso SPDA (JAPAN)

第2章 フジタの巴里：越境者の原風景

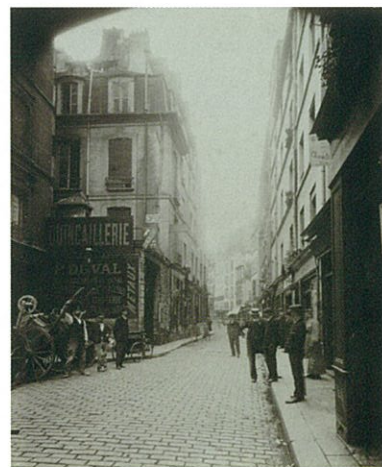
1913年にパリに到着し、1920年代に「乳白色の下地」と繊細な線描を特徴とした独自のスタイルを確立したフジタ。しかし、渡仏した当初に、彼がパリ市街を囲む城壁周辺の風景画に集中的に取り組んでいたことは、あまり知られていません。当時、フジタは、自分と同じ移住者が多く暮らし、寂寥感の漂うパリ郊外の風景に惹きつけられ、ルソーやユトリロにならぬような風景を表わしました。パリ周縁の風景は、フジタの越境者としての原風景だったのです。



レオナール・フジタ (藤田嗣治) 《風景》 1917年 個人蔵
 © Fondation Fujita / ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2016 G0484

第3章 アジェのパリ

アジェは、失われつつあった19世紀パリの古き良き時代の姿を、丹念に記録した職業写真家です。パリ市内の街路、店舗、路上の商人や職人の姿、そして郊外の風景とそこに暮らす人々を克明に捉えています。最晩年にシュルレアリスムの芸術家たちに注目され、その後「近代写真の父」と呼ばれるまでに評価は高まりました。本章では約120点のアジェの写真を4期に分けて展示します。同時代のルソーやシュルレアリストのデ・キリコの作品などをあわせて展示しながら、20世紀の近代写真の先駆者としてのアジェに光を当てます。



ウジェーヌ・アジェ 《古い館、サン＝ソヴール通り79番地、パリ2区》1910年
 東京都写真美術館蔵 (展示期間：9/10-12/5)

第4章 壁に刻む：ユトリロ、ヴラマンク、佐伯、岡

パリの街路を飽くことなく描き続けたモンマルトルの画家ユトリロ。郊外風景や、ひなびた漆喰壁をそのまま画布に移したかのような画肌の作品は、フジタや佐伯祐三を魅了します。

建物の古い壁に刻まれた落書きのように、画家たちはパリの街に向き合い、自己の存在を鉛筆にのせて、風景画に刻み付けていきました。この章では、パリの街並みや郊外風景を主題としたユトリロ、ヴラマンクの作品とともに、渡仏した日本人画家・佐伯祐三、里見勝蔵、岡鹿之助らの風景画を展覧し、それぞれが追究したパリの姿を紹介します。



モーリス・ユトリロ 《ラ・ベル・ガブリエル》1912年 ポーラ美術館蔵

第5章 フジタとプティ・メティエ

時代は移り1950年代末、フジタは小さな約15cm四方の板に、絵を描く職人、そしてパリの片隅の住人としての自己を投影するかのよう、さまざまな「プティ・メティエ (しががない職業)」に従事する子どもの姿を描き始めます。この章では特に、フジタが手仕事にこそしむ自画像や、子どもたちをテーマに描いた作品とともに、〈小さな職人たち〉を、「パリの境界線」にまつわる5つのテーマに沿って展示します。フジタが自己に、パリの愛すべき友人たちに、そして祝福すべき子どもたちに注いだまなざしを探ります。



レオナール・フジタ (藤田嗣治) 《姉妹》1950年
 ポーラ美術館蔵
 © Fondation Fujita / ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2016 G0484

愛すべき境界線の人々

フジタの連作〈小さな職人たち〉には、地方や周辺諸国から職を求めてパリにたどり着いたしががない職人たちが、ユーモアあふれる姿で描かれています。その姿はアジェの写真にも捉えられ、貧しくもひたむきに仕事に向かう職人たち、また、社会の周辺に追いやりながらも、必死に生き抜こうとする人々の姿が生き生きと表現されています。時代の変化とともに消えつつあったまじめな職人たちだけでなく、芸術に生きる「詩人」や、「すり」などの犯罪者たちも登場します。フジタは、大人でも子どもでもないいわば「境界の人」の個性あふれる姿により、「パリの境界線」を多面的に表わしたのです。

第1章 フジタのパリを作る人々



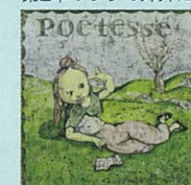
《瓦職人》

第3章 フジタの街で商う人々



《古着屋》

第2章 フジタの郊外に憩う人々



《詩人》

第5章 フジタの社会に背く者たち



《すり》